

惠迪寮  
寮歌集  
目次

一	都ぞ弥生	1
二	校歌 永遠の幸	3
三	一帯ゆるき	4
四	藻岩の緑	5
五	魔神の呪い	6
六	春雨に濡る	7
七	瓔珞みがく	8
八	蒼空高く翔らむと	9
九	黒潮鳴れる	10
十	タンネの氷柱	11
十一	春未だ浅き	12
十二	津軽の滄海の	13
十三	湖に星の散るなり	14
十四	天地の奥に	15
十五	時潮の波の	16
十六	暁の渚離りて	17
十七	花繚乱の	18
十八	別離の歌	19
十九	ストームの歌	20

都ぞ弥生（明治四十五年寮歌）

横山 芳介君 作歌  
赤木 顕次君 作曲

一

都ぞ弥生の雲紫に 花の香漂ふ宴遊の薙  
尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮れては移らふ色の  
夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我胸想ひを載せて  
星影冴かに光れる北を

人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に 雁 遙々沈みてゆけば  
羊群声なく牧舎に帰り 手稲の嶺 黄昏こめぬ  
雄々しく聳ゆる楡の梢 エルム 打振る野分に破壊の葉音の  
さやめく 蕨に 久遠の光り  
おごそかに 北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸れる針葉樹林 櫛の音凍りて物皆寒く  
野もせに乱るる清白の雪 沈黙の暁霏々として舞ふ  
ああその朔風 飄々として 荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ  
ああその蒼空 梢 聯ねて  
樹氷咲く 壮麗の地をここに見よ

四

牧場の若草陽炎燃えて

森には桂の新緑萌し

雲ゆく雲雀に延齡草の

真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光

小河の澗をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉

春の日の この北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り

平原果てなき東の際

連なる山脈玲瓏として

今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術を懐みつつ

高鳴る血潮のほとばしりもて

貴とき野心の訓へ培ひ

栄え行く 我等が寮を誇らずや

校歌 永遠の幸（札幌農学校校歌）

大和田健樹氏 たけき 校閲

有島 武郎君 作歌

納所弁次郎氏 選曲

一

永遠とこしえの幸 朽ちざる誉 つねに我等がうへにあれ  
よるひる育て あげくれ教へ 人となしし我庭に

イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ

豊平の川 尽せぬながれ 友たれ永く友たれ

二

北斗をつかん たかき希望のぞみは 時代ときを照す光なり  
深雪みゆきを凌ぐ 潔みよおき節操は 国を守る力なり

イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ

豊平の川 尽せぬながれ 友たれ永く友たれ

三

山は裂くとも 海はあすとも 真理正義おつべしや  
不朽を求め 意気相ゆるす 我等まがら丈夫此こゝにあり

イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ

豊平の川 尽せぬながれ 友たれ永く友たれ

一帯ゆるぎ（明治四十年寮歌）

田中 義麿君 作歌

高松 正信君 作曲

一

一帯ゆるぎ石狩の

源遠く霞罩め

五彩を染むる夕照は

手稻の夏の栄にして

そこに無限の恩寵あり

是吾校の在る処

二

胡沙吹く風に秋闌けて

黄葉散りしく牧場千里

満野の吹雪叱咤する

エルムの姿壮なれや

そこに無限の偉力あり

是吾寮の在る処

三

偲へば遠き三十年の

榛莽あしたの日を蔽ひ

ゆふべの月に羆熊吼る

北海の野に鋤入れて

偉人が植ゑし桜花

薫は高し千万古

藻岩の緑（明治四十四年寮歌）

松山 茂助君 作歌

柳沢 秀雄君 作曲

一

藻岩の緑春た闌けて  
憧憬あこがれあや彩と流れては  
若き血潮の躍る時

万ばん朶だ一朶の朝霞  
花く皆奇しき香ならずや  
希望の前途光あり

二

青葉波よるアカシヤの  
長風夏の雲ゆらぎ  
鐘声止みて今暫し

薫る木影に立ちよれば  
秋は牧場の夕まぐれ  
牛の背に散るつたもみじ蔦紅葉

三

あはれ「美の国」石狩の  
おほし立つ可き人皆の  
一撃万里す大鵬おおたけの

自然を己おのが揺籃えうらんに  
意気紅霓こうげいに似たるかな  
翼整装つばさつくみふ思あり

魔神の呪（大正六年寮歌）

佐藤 惣之助君 作歌

植村 泰二君 作曲

一

魔神の呪アルペンの  
見よ永劫と誓ひけん  
吹く凋落の秋風に

白雪永久に清からず  
平和の春は短くて  
正義の光影くらし

三

嗚呼北海の荒吹雪  
胸の狂瀾青春の  
力の緒琴高鳴りて

白箭膚を擘くも  
血潮に如何で比すべきぞ  
紅燃ゆる悶えあり

六

今宵榆影に団欒して  
廻る盃夜も更けて  
いざ吾が友よ熟睡せむ

月影に酌む自治の宴  
北斗傾く玻璃の窓  
明日は人生の旅なれば

春雨に濡る（大正十二年寮歌）

高橋 北雄君 作歌

西田 貫道君 作曲

一

春雨に濡るアカシヤ花  
地は銀鼠にたそがるる  
心にめざむ爽かの  
街路の灯はなやかに  
寂かに歩む若人が  
灑み充てる力かな

二

夏の入陽に砂丘の  
融けざる銀の山脈は  
名残の光身にあびて  
狨虎の骨に鷗飛ぶ  
碧薄れゆく空にうく  
異郷の方を思ふかな

三

仄青白き白樺や  
谷また谷を辿り行き  
焚火を囲み歌ふ寮歌  
落葉ふむ音寂しくも  
今宵は淡き夢見んと  
紫紺の闇に解けて行く

四

青き空透き銀の月  
雪の野隅は靄こめて  
琥珀の酒を汲み交し  
石狩の河波光る  
灯漂ふアイヌ小屋  
王者の誇憊ぶかな



瓔珞みがく（大正九年桜星会歌）

佐藤 一雄君 作歌

置塩 奇君 作曲

一

瓔珞みがく石狩の 源遠く訪ひくれば

原始の森は闇くして 雪解の泉玉と湧く

二

浜茄子紅き磯辺にも 鈴蘭薫る谷間にも

愛奴の姿薄れゆく 蝦夷の昔を懐ふかな

三

今円山の桜花 歴史は旧りて四十年

吾が学び舎の先人が 建てし功はいや栄ゆ

四

その絢爛の花霞 憧憬れ集ふ四百の

健児が希望深ければ 北斗に強き黙示あり

蒼空高く翔らむと（昭和二年寮歌）

土井 恒喜君 作歌

長谷川 吉郎君 作曲

一

蒼空高く翔らむと  
力は胸に溢れつつ

暫しやすらふ楡の蔭  
翼つくるふ思かな

二

朝曠野の露を吸い  
驚き瞳る幼鵬の

夕北斗の囁きに  
清き眸君見ずや

三

うら若き日の悦びを  
理想の潮湧き出づる

はかなきものと誰か  
生命の海の高鳴るを

四

若きに芽ぐむ数々の  
迪を恵ねて辿りゆく

深き苦悩は身にあれど  
遊子の真意君知るや

五

茫茫千里石狩の  
雪さんらんと散るところ

野は澄みわたる銀の  
われらが魂の故郷かな

六

若き勇者よオキクルミ  
短檠すでに光消え

熊をはふりて饗宴せし  
東の空はかぎろひぬ

黒潮鳴れる（昭和四年寮歌）

須田 正美君 作歌  
森 忠文君 作曲

一

黒潮な鳴れるわたつみ 滄海越えて  
原始の大森もりに八光揺ぎ

際限きわ無き春を北州に訪ふ  
若草の曠野のに羊群遊ぶ

二

情懷こころは朧月つきに仄ほのかに薫る  
恋ふる往昔むかしの静寂しじつけき名残り

アカシヤの白花はな慕ひて歩む  
古塔にひびく懐しき鐘

三

紅光くれなるうすくエルムに映えて  
漂白さすらひ行ける白雲くも影仰ぎ

草笛かそかに牧場にながる  
無心の若人こらは緑に臥せり

タンネの氷柱（昭和八年寮歌）

卜部 清君 作歌

白石 祐義君 作曲

一

タンネの氷柱消ゆる頃

胡蝶は眠る春の宿

牧場に結ぶ夢遙か

青き希望の雲峯こえて

四海に羽振る若鷗の

石狩を立つ意気をみん

二

朝里の丘に鳥頭咲けば

蝦夷が芙蓉の雪とけて

千尋の懸崖ゆくだけ入る

忍路の沖の真白帆に

万里の波濤翔らんと

白鷗はしばし憩ふなり

三

真紅の夕陽山の端に

もゆる紅葉をかざしたる

友がゆくての野を遠く

幌馬車の影消え去りぬ

蓬髪胡風に靡けつつ

懐情は尽きず果てもなく

四

十勝の峰に捲き起る

吹雪怒りて咆ゆる夜も

旭光東に色めけば

熊追ふ愛奴の雄叫びに

大雪原の霊光や

無絃琴の音ぞ高し

五

懸る垂氷に月くだけ

千々の瞑想は来し方の

六十の秋はしるくして

緑に浮ぶ白亜城

苔むす榆鐘の哀調きけ

若き力を求むなり

春未だ浅き（昭和十二年第三十回記念祭歌）

平城 鷹雄君 作歌

穴戸 昌夫君 作曲

一

春未だ浅き白楊の

雪解の小路たたずめば

しばし聞けとて私語わひごの

木の間もれくる夕嵐

二

あはく足げに咲き出でし

おぼろおぼろの水芭蕉

なつかしの原始もと杜肩りとりて

榎ほた火たをめぐり歌はなん

三

長髪ながみ類るいに戯あそむれて

昔むかし変からぬ風かぜなれや

今いましたたへんみそ三十回たの

青史あおしをかざす記念祭

四

美酒うましの夜よは更さらけ行いけど

尽をのこきぬ男子おとこの黒潮くろしほを

契ちぎりの杯つぎに汲くみみ交まはし

常とぎ緑はを祝いわふ自治じの宴うたげ

津軽の滄海の（昭和十二年寮歌）

一階堂幸一君 作歌

高橋 寛君 作曲

一

津軽の滄海の渦潮わけて  
雄大<sup>おほ</sup>き想<sup>こころ</sup>ひを北斗<sup>きた</sup>に馳<sup>は</sup>する  
若<sup>わか</sup>き情<sup>こころ</sup>懷<sup>こころ</sup>は北<sup>きた</sup>溟<sup>めい</sup>の自然<sup>しぜん</sup>に  
抱<sup>いだ</sup>擁<sup>おん</sup>かれて今<sup>いま</sup>野<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>培<sup>つちか</sup>う

四

豊<sup>みのり</sup>穰<sup>り</sup>の秋<sup>あき</sup>の讚<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>を奏<sup>あそ</sup>で  
ポ<sup>ポ</sup>プラ<sup>プラ</sup>の高<sup>たか</sup>梢<sup>さか</sup>さやかに揺<sup>ゆ</sup>ぐ  
北<sup>きた</sup>溟<sup>めい</sup>の蒼<sup>あお</sup>穹<sup>くわう</sup>紺<sup>こん</sup>碧<sup>へき</sup>に透<sup>す</sup>き  
生<sup>いき</sup>の歡<sup>よろこ</sup>喜<sup>び</sup>我<sup>われ</sup>が胸<sup>むね</sup>懷<sup>こころ</sup>に充<sup>み</sup>溢<sup>あふ</sup>つ

二

ア<sup>あ</sup>カ<sup>か</sup>シ<sup>し</sup>ヤ<sup>や</sup>の白<sup>は</sup>花<sup>な</sup>散<sup>ち</sup>り敷<sup>き</sup>く夕<sup>ゆ</sup>べ  
白<sup>しろ</sup>銀<sup>ぎん</sup>の月<sup>つき</sup>仄<sup>は</sup>かに浮<sup>う</sup>ぶ  
牧<sup>ま</sup>場<sup>ば</sup>添<sup>そ</sup>ひの野<sup>の</sup>路<sup>じ</sup>道<sup>みち</sup>遙<sup>は</sup>ひゆ<sup>ゆ</sup>け<sup>ば</sup>  
羊<sup>ひつじ</sup>の群<sup>ぐん</sup>れは声<sup>こゑ</sup>なく去<sup>さ</sup>りぬ

五

飄<sup>ひら</sup>々<sup>々</sup>の風<sup>かぜ</sup>声<sup>こゑ</sup>疎<sup>そ</sup>林<sup>りん</sup>に沈<sup>ひ</sup>潜<sup>そ</sup>み  
無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>の静<sup>しじま</sup>寂<sup>じま</sup>天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>に充<sup>み</sup>満<sup>み</sup>てり  
寒<sup>せむ</sup>月<sup>げつ</sup>は鋭<sup>と</sup>利<sup>と</sup>く虚<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>を截<sup>き</sup>りて  
我<sup>われ</sup>が行<sup>ゆ</sup>く孤<sup>か</sup>影<sup>かげ</sup>よ霜<sup>しも</sup>に凍<sup>こ</sup>りぬ

三

石<sup>いし</sup>狩<sup>かり</sup>の平<sup>の</sup>野<sup>の</sup>に爽<sup>さわ</sup>夏<sup>なつ</sup>訪<sup>ま</sup>れて  
原<sup>もと</sup>始<sup>もと</sup>の大<sup>も</sup>森<sup>もり</sup>は緑<sup>か</sup>影<sup>かげ</sup>も小<sup>を</sup>暗<sup>くら</sup>し  
郭<sup>くわく</sup>公<sup>こう</sup>の朗<sup>こゑ</sup>声<sup>しじま</sup>静<sup>ま</sup>寂<sup>ま</sup>に徹<sup>と</sup>り  
清<sup>すが</sup>涼<sup>りやう</sup>しき朝<sup>あさ</sup>の熟<sup>う</sup>睡<sup>まい</sup>を破<sup>やぶ</sup>る

六

白<sup>しろ</sup>銀<sup>ぎん</sup>の六<sup>は</sup>華<sup>な</sup>莊<sup>お</sup>蔵<sup>そ</sup>に咲<sup>さ</sup>く  
山<sup>やま</sup>嶺<sup>ね</sup>奥<sup>おく</sup>深<sup>ふか</sup>く彷徨<sup>あこが</sup>れ行<sup>ゆ</sup>けば  
あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>壮<sup>さう</sup>麗<sup>り</sup>の樹<sup>じゆ</sup>氷<sup>ひ</sup>の森<sup>もり</sup>よ  
冬<sup>ふゆ</sup>の神<sup>く</sup>秘<sup>し</sup>に我<sup>われ</sup>が胸<sup>むね</sup>戰<sup>ふる</sup>慄<sup>ふる</sup>ふ

湖に星の散るなり（昭和十六年寮歌）

切替 辰哉君 作歌

岡田 和雄君 作家

一

湖に星の散るなり幽かそけさよ松の火燃えて

漕ふぎ出づる愛奴の漁舟の岸た辺佇ち泌々眺む

旅の日ははや暮れゆきぬ夢に酔ひ夢にぞ歎なかん

汚うれなき心を慕ふ大いなる支笏の湖よ

花若く我な汝が許もとに

希望みの満ち今宵宿らん

二

轟おたけけるかの雄叫びよ創造の歷程一路

新しき使命に捧げ幸の今日にしあれば

忍も苦して欣求むるところ得べくして得べからざりし

秀麗うるわしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉

若き世の秩序を背負ふ

洋々の日と俱にゆかなむ

天地の奥に（昭和十八年寮歌）

橋爪 秀雄君 作歌

池田 政晴君 作曲

一

天地の奥に征く吾や

孤杖無限に旅立ちて

溪巒はるか訪ね来し

楡陵の宿や三春の

旅にしあれどそは深き

噫魂のふるさとか

二

四大も夢む幌のさと

歌の心を温ぬれば

馥り床しきアカシヤの

花仄白き憂あり

夏宵の霞驟びきて

月皎々の滄海をゆく

三

大空風に咽ぶよひ

暮鐘は低く漂ひて

荒野は凋落の悲歌に泣く

栄枯は移る秋の日の

秋思の歩み運ぶ夜半

久遠の星を仰がずや



時潮の波の（昭和二十一年寮歌）

渋谷 とみなり 富業君 作歌

寺井 幸夫君 作曲

序

厳しかる道に仕へて 限ある玉緒惜しむ

げにさあれ深き因縁の えにし 魂ゆるる生命の饗宴

汲まざらめや残の月に のしづ 旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間を 久遠の岸に佇みて

不壊の真珠を漁りする ふゑ またま 嗚呼三星霜の光荣よ

緑の星を夢む時 こしゆゑ 疎梢を払ふ天籟は

秘誦の啓示語るなり

結

近きかな榆陵を去る日は 還り来ぬ足跡愛しみて

ひたぶると打笑む時ぞ 求めつつ得べからざりし

秀邃しき真理の道は 是るかなり我等が前途

進まざらめや

暁の渚離りて（昭和二十二年寮歌）

篠原 昭壽君 作歌

竹内 五男君 作曲

一

暁の渚離りて

ふるきもの光なきもの

底ひなき海に抛れば

いささけき水輪が呼ばふ

思ひ出の古りし仕草に

告ぐるなりいたき別れを

二

永遠に絶ゆることなく

ひたひたと寄する波間に

万象のよみがへりしを

はぐくみしなさけ忘れず

眞実の旗幟を取り持ち

いゆくものひたあゆむもの

花繚乱の（昭和二十二年寮歌）

前島 一淑君 作歌・作曲

一

花繚乱の夢に酔い

今紅の篝火よ

四

地の囁きの音に伏せば

裸形の友は肩組みて

草湫々の声すなり

去り行く青春を惜しむかな

二

夜光流るる芝草や

静寂甦りぬ春の宵

五

辛夷の花の香に迷う

銀漢の下希望なる

遠き憧れ逝にし日よ

支笏の湖に星は飛ぶ

三

窓辺に招く幻の

影にあくがれ彷徨えば

森に桂の火は燃えぬ

別離の歌（昭和六年閉寮記念寮歌）

大槻 均君 作歌

中村小弥太君 作曲

草木すら時に悲歌を嘆ず 永劫の時の流れの尽きざるに、  
人の世の凡ての何ぞはかなき。

懐しき友よ、

彼の寮を思ひ浮べて心静かに「別離の歌」を奏でん。

一

高遠たかきを誇る自治寮よ 星永遠とこしへに流れては

春秋ここに二十六 逝きて帰らぬ春風を

恨む今宵の若草くさの上 これ先人が夢の跡かな

二

移ろふ世習ならい泣くは誰たそ 原始の森に咲く枝を

手折たりて結ぶ友垣が 燃ゆる生命のかがり火に

光る瞳は幸福星アストラか 強く正しく友よ生きなむ

三

明日の宿居しゆくは知らねども 吾に友あり、吾強し

降ふる苦難くなんをとみにせん 誓ちかふ心の酒杯さかづきに

尽きぬ名残なみだの涙なみだする 今宵限りのこの宴いひなひかな

## ストームの歌

醒めよ迷ひの夢さめよ

醒めよ迷ひの夢さめよ

一

札幌農学校は蝦夷ヶ島 熊が棲む

荒野に建てたる大校舎コチャ

エルムの樹影こかけで真理解く

コチャエ コチャエ

二

札幌農学校は蝦夷ヶ島 手稲山

夕焼け小焼けのするところコチャ

牧草片敷き詩集読む

コチャエ コチャエ

三

札幌農学校は蝦夷ヶ島 クラーク氏

ビーアンビシヤスポーイズとコチャ

学府の基を残し行く

コチャエ コチャエ